小児慢性特定疾患等の疫学に関する研究
平成９年度総括研究報告書

分担研究者　原田研介

要旨：平成８年度までは「川崎病のサーベランスとその解析に関する研究」という分担研究題名で研究を行ってきたが、平成９年度からは「小児慢性特定疾患等の疫学に関する研究」と変更になった。川崎病のサーベイランスはこの研究の一部として行われた。小児慢性特定疾患10疾患群の適正化に対する検討を行った。川崎病に関しては、第14回全国調査を実施した。これらの研究の結果と個別研究について報告した。

見出し語：小児慢性特定疾患、川崎病、サーベイランス

研究組織：
・分担研究者：原田　研介（日本大学小児科）
・研究協力者：
柳川　　洋（自治医大公衆衛生）
中沢　眞平（山梨医大小児科）
内山　　聖（新潟大学小児科）
森川　昭廣（群馬大学小児科）
石澤　　瞭（国立小児病院循環器科）
奥野　晃正（旭川医大小児科）
宮田晃一郎（鹿児島大学小児科）
松浦　信夫（北里大学小児科）
黒田　泰弘（徳島大学小児科）
小宮山　淳（信州大学小児科）
飯沼　一宇（東北大学小児科）
薗部　友良（日赤医療センター小児科）
尾内善四郎（京都府立医大小児疾患研究施設）
古庄　巻史（京都大学発達小児科）
加藤　裕久（久留米大学小児科）
馬場　國藏（西神戸医療センター小児科）
浅井　利夫（東京女子医大第二病院小児科）
古川　　漸（山口大学小児科）
・顧問：川崎　富作（日本川崎病研究センター）

１．小児慢性特定疾患について

小児慢性特定疾患治療研究事業は昭和49年度から開始された。これによって医療の普及が図られ、併せて、慢性疾患を有する子ども及び、その家族への経済的負担が軽減され、子どもたちの育成に貢献してきた。一方、近年、給付人員が増加し、これに伴う事業費が大きく伸びて

日本大学医学部小児科（Department of Pediatrics, Nihon University）

いる。また、一部の疾患において、対象者数の地域的偏りがみられる。このような状況の中で、この事業のあり方についての検討を行った。各疾患群ごとにこの事業の対象とする範囲の基準を検討した。その結果、次のような意見が出された。

① ヒト成長ホルモン治療の対象にする基準を適正化、明確化する。

② アレルギー性紫斑病に対する基準を適正化する。

③ 軽症例の結節性硬化症に対する検討

等である。

これらの意見を“小児慢性特定疾患に関する検討会”に送った。

2．小児慢性特定疾患の今後の研究について

平成10年度から小児慢性特定疾患治療研究事業の意見書の変更が行われる。これによって今までよりも更に詳細な情報が得られる。また都道府県等における審査体制の整備が行われる。これらの変更に伴う、今後行うべき研究の検討を行った。意見書を用いての今後の研究についていくつかの疾患について、研究協力者から意見が述べられている。

3．川崎病の疫学について

1995～1996年の2年間の川崎病の全国調査を行った。これは第14回目の全国調査である。この2年間の患者数は12,531人(1995年6,107人、1996年6,424人)であった。性比1.37で男児に多い。0～4歳人口10万対罹患率は1995年が102.6、1996年が108であった。患者数罹患率ともに増加の傾向にある。心後遺症の発生率は12.1%で、そのうち冠動脈瘤は8.2%にみられる。

4．川崎病に対するガンマグロブリン 投与について

ガンマグロブリンの大量(1g/kgあるいは2g/kg 1回投与例104例を検討した。冠動脈瘤の発生頻度は400mg/kg×5日と差がない。しかし1回投与の方が、入院期間が短かくなり、総医療費、平均在院日数の削減につながる。

5．川崎病不全型の臨床像について

①発熱が必ずしも最初に出現しない。②CRP値が低い。③有熱期間が短かい。④入院期間は1週間以内が多い。などの特徴があった。臨床的には軽症が多いが、死亡例もある。不全型であっても、確実な判断と治療が必要である。

6．個別研究

古川らは川崎病の脳血管炎の有無を検討するためにSPECT を施行した。21名中6名に急性期に一過性の局所脳血流低下を認めたと報告している。長期的には臨床的に問題を残していないが、新しい発見である。

原田らは、第14回川崎病全国調査から、急性期における血小板数の解析を行っている。重症例において、血小板数の減少が激しく、川崎病急性期での血小板数の減少は、リスクファクターとしての重要な指標と考えられる。今迄の考え方が正しかったことを保障している。

原田らは、ガンマグロブリンの必要量の検討を行っている。ガンマグロブリン投与後2日目で、白血球数減少量5000/mm³か、IgG値増加量700mg/dlが解熱に関与する因子と考えられる。従って、これらを満足するガンマグロブリンの量が必要と判断される。更なる検討が必要である。

古庄らは、川崎病既往例に対して、ポジトロンＣＴ(PET)を行って、心筋障害の評価を行った。PETによって、心筋のviabilityは正確に判断できると報告している。

浅井らは、川崎病の第１、第２病日における血液検査所見の解析を行っている。強い急性炎症反応と、肝機能異常が高頻度にみられたと報告している。例数が15例である。更に多くの例で検討される必要がある。

原田らは、経胸壁ドプラ心エコー法を用いて冠予備能の測定を行っている。冠動脈障害例で冠動脈内の最高流速が有意に低値であった。この方法によって、非観血的に冠動脈狭窄の程度を判断することが可能になって来る。

薗部らは、免疫グロブリン療法時代の冠動脈障害発生率と原田のスコアとの関係を検討している。ガンマグロブリン治療によって瘤の発生率には大きな違いはなかったが、瘤の質の変化がみられる。大きな瘤の発生が減少している。また原田スコアはガンマグロブリン治療の適応決定に有用であると報告している。

第14回川崎病全国調査から急性期における血清アルブミン値の解析を行っている。心後遺症合併例に低値を示すものが多く、巨大冠動脈瘤合併例では更にこの傾向が強いと報告している。原田スコアに利用されているアルブミン値は意義あるものと結論できる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要旨:平成8年度までは「川崎病のサーベランスとその解析に関する研究」 という分担研究題名で研究を行ってきたが、平成9年度からは「小児慢性特定疾患等の疫学に関する研究」 と変更になった。川崎病のサーベイランスはこの研究の一部として行われた。小児慢性特定疾患10疾患群の適正化に対する検討を行った。川崎病に関しては、第14回全国調査を実施した。これらの研究の結果と個別研究について報告した。